

終バスの情炎～ライバルが朝まで蕩ける夜～

目次

1. 第1話：憎悪の火種
2. 第2話：密室の緊張
3. 第3話：理性の崩壊
4. 第4話：情熱の交錯
5. 第5話：朝の覚醒
6. 第6話：新たな絆

第1話：憎悪の火種

居酒屋の喧騒が耳に張り付く。サ——クル対抗イベントの打ち上げは、勝者の歓声と敗者の悔しさが入り混じった熱気に包まれていた。

「っせ——な、黙ってるよ」

狼谷蓮は、隣のテ——ブルから聞こえてくる軽音サ——クルの笑い声に舌打ちした。ジョッキを握る手に力が入る。体育会系サ——クルは今回、惜しくも二位だった。一位は——。

「あれ、蓮くんじゃ——ん！お疲れ様——！」

聞き慣れた声が背後から降ってきた。振り返ると、神楽悠人が満面の笑みでこちらに手を振っている。茶色の髪が照明に照らされて、やけに軽薄に見えた。

「.....チツ」

「え——、そんな顔しないでよ。いい試合だったじゃん」

「うっせ。話しかけんな」

蓮は再び前を向いた。だが悠人は気にした様子もなく、蓮の隣に滑り込んできてくる。

「まあまあ、飲もうよ。ほら」

差し出されたジョッキを、蓮は睨みつけた。

「誰がお前と飲むかよ」

「あはは、相変わらずツンツンしてんな——。可愛い」

「は？」

蓮の拳がテ——ブルを叩いた。周囲の視線が一斉に集まる。

「何が可愛いだ。舐めてんのか」

「舐めてないよ——。本当に可愛いなって思っただけ」

悠人の笑顔には、どこか挑発的な光が宿っていた。蓮の眉間に皺が深く刻まれる。

「お前、いつもそうやってヘラヘラしてんな。そんなんでも一位取れて満足か？」

「満足だよ。だって勝ったもん」

「……ッ」

蓮は悠人の襟首を掴んだ。周囲がざわめく。

「表出る」

「やだよ——。ここ、居心地いいもん」

悠人は蓮の手を払いのけ、グラスに口をつけた。その仕草が、蓮には無性に腹立たしかった。

「てめえ……」

「ねえ、蓮くん。また次も対決しよ——よ。その時はもっと本気出してね」

「誰が本気出してねえって言った」

「じゃあ本気で負けたんだ。ふ——ん」

蓮の拳が震えた。殴りたい。だが、ここで暴力沙汰を起こせばサ——クルに迷惑がかかる。それだけは避けなければならない。

「……覚えてろよ」

「うん、覚えとく」

悠人は軽く笑って、自分のテ——ブルへ戻っていった。その背中を、蓮は睨みつけ続けた。

その後、蓮は苛立ちを紛らわすように酒を煽った。気づけば、周囲の景色が揺れている。時計を見ると、終電の時間をとうに過ぎていた。

「やべ……」

蓮はふらつきながら立ち上がった。同じサ——クルのメンバ——に声をかけようとしたが、皆すでに酔い潰れている。仕方なく、一人で店を出た。

夜風が頬を撫でる。酔いが少しだけ醒めた気がした。スマホを取り出し、夜行バスの空席を検索する。運良く一席だけ残っていた。

「助かった……」

予約を完了し、バス停へ向かう。足取りは覚束ないが、なんとか辿り着いた。すでに数人の乗客が列を作っている。

蓮は列の最後尾に並んだ。目を閉じると、酒の酔いと疲労が一気に押し寄せてきた。

「うっわ、マジで？」

聞き覚えのある声に、蓮は目を開けた。列の前方に、悠人の姿があった。

「……嘘だろ」

悠人もこちらに気づいたらしい。目が合うと、彼は苦笑いを浮かべた。

「あはは……奇遇だね」

「……最悪だ」

蓮は視線を逸らした。だが悠人は、列を離れて蓮の元へやってくる。

「ねえ、蓮くんも夜行バス？」

「見りゃ分かんだろ」

「そっか。じゃあ一緒だね」

「一緒じゃねえよ。お前と同じバスとか、罰ゲ——ムかよ」

「ひどいな——。でも、まあ、僕も正直キツいかも」

悠人の笑顔が、ほんの少しだけ曇った。その表情を見て、蓮は何かを言いかけたが、結局口を閉ざした。

やがて、バスが到着した。乗客たちが次々と乗り込んでいく。蓮もその列に続いた。

座席番号を確認し、自分の席へ向かう。窓側の席だった。荷物を棚に上げ、座席に腰を下ろす。

すると、隣の通路側の席に、悠人が座った。

「.....はあ？」

「あ、やっぱり隣だったんだ」

悠人は、どこか諦めたような笑みを浮かべた。

「冗談だろ.....」

「冗談じゃないよ。ほら、番号」

悠人が見せたチケットには、確かに蓮の隣の座席番号が記されていた。

「最悪だ.....」

「まあまあ、仲良くしようよ」

「誰がお前と仲良くすんだよ」

蓮は窓に顔を向けた。悠人の顔など見たくなかった。

バスが動き出す。車内には、ぼつぼつと乗客が座っているだけで、それほど混んではいなかった。それでも、隣に悠人がいるという事実だけで、蓮の苛立ちは収まらなかった。

「ねえ、蓮くん」

「なんだよ」

「今日さ、本当にいい試合だったと思うよ」

「.....ッ」

蓮は悠人を睨んだ。だが、悠人の表情には、先ほどの挑発的な光はなかった。ただ、真っ直ぐにこちらを見つめている。

「僕らが勝ったのは、運もあったと思う。次は分かんないよ」

「.....お前、何が言いてえんだよ」

「ん——、別に。ただ、蓮くんのこと、ちゃんと見てたなって」

その言葉に、蓮の胸に奇妙な感覚が走った。苛立ちとは違う、何か——。

「.....うっせ。寝るから話しかけんな」

蓮は目を閉じた。だが、悠人の言葉が、頭の中で何度も反響した。

やがて、車内の照明が落とされた。消灯の時間だった。

蓮は薄目を開けた。暗闇の中、悠人の気配が隣にある。その温度が、やけに近く感じられた。

酔いがまだ残っているのか、意識が朦朧としている。体が重い。だが、眠れなかった。

隣から、悠人の規則正しい呼吸音が聞こえてくる。もう寝たのだろうか。

蓮は再び目を閉じた。明日の朝まで、この地獄のような時間が続くのかと思うと、溜息が漏れた。

だが、その時——。

悠人の腕が、蓮の腕に触れた。

「.....ツ」

蓮の体が硬直する。偶然だ。ただの偶然だ。そう自分に言い聞かせた。

だが、悠人の腕は、そのまま離れなかった。

蓮の心臓が、激しく脈打ち始めた。

第2話：密室の緊張

暗闇の中、蓮の呼吸が浅くなった。悠人の腕が、自分の腕に触れている。その温度が、シャツ越しでもは

っきりと伝わってくる。

偶然だ。ただ寝返りを打っただけだ。

蓮は自分にそう言い聞かせた。だが、悠人の腕は離れない。むしろ、わずかに圧力が強まった気がした。

「……おい」

小声で呼びかける。返事はない。悠人の呼吸は相変わらず規則正しい。本当に寝ているのだろうか。

蓮は腕を引こうとした。だが、その瞬間——悠人の指が、蓮の手首を掴んだ。

「ッ……！」

心臓が跳ね上がる。蓮は悠人の顔を見た。暗闇で表情ははっきりしないが、目が開いているのが分かった。

「……起きてんのかよ」

「うん」

悠人の声は、いつもの軽薄さがなかった。低く、どこか掠れている。

「なら離せよ」

「やだ」

「はあ？」

蓮は腕を振り払おうとした。だが悠人の握力は思いのほか強く、簡単には外れなかった。

「お前……何のつもりだよ」

「分かんない」

悠人の親指が、蓮の手首の内側を撫でた。脈打つ場所を、ゆっくりと。

「ッ……」

蓮の体に電流が走った。これは——まずい。

「離せて」

「蓮くん、すごい脈速だね」

「うっせ……酒のせいだ」

「そっか」

悠人の手が、蓮の手のひらへと滑り降りてきた。指先が、蓮の指に絡みつく。

「……悠人」

「ん？」

「お前、何考えてんだ」

「何も考えてないよ」

嘘だ。そう思った。悠人の指の動きは、明らかに意図的だった。

蓮の喉が渴く。唾を飲み込む音が、やけに大きく聞こえた。

「おい……周りに人、いるんだぞ」

「知ってる。だから、静かにしてないとね」

悠人の声に、笑みが混じった。その響きが、蓮の背筋をざわつかせる。

「てめえ……」

「ねえ、蓮くん」

悠人の顔が近づいてくる。耳元で、囁くように。

「本当は、嫌じゃないんでしょ？」

「……ッ」

蓮は何も言い返せなかった。否定する言葉が、喉の奥で引っかかる。

悠人の手が、蓮の太腿に触れた。

「ちょ……おま……」

「シ——ッ」

悠人の指が蓮の唇に触れた。それから、自分の膝の上にあったブランケットを、蓮の膝にも広げる。

暗闇と毛布に覆われた空間。他の乗客からは見えない。

蓮の股間が、じんわりと熱を持ち始めた。

「……クソ」

「あはは、素直じゃないなあ」

悠人の手が、ブランケットの下で蓮の太腿を這い上がってくる。ゆっくりと、確かめるように。

「や……やめろ」

「やめて欲しい？」

「……ッ」

蓮は答えられなかった。体は拒絶を叫んでいるはずなのに、股間は正反対の反応を示している。

悠人の指が、蓮のジ——ンズの股間部分に触れた。

「うわ……もう、こんなに」

「うっせ……」

蓮は顔を背けた。羞恥と怒りと、そして抑えきれない興奮が混ざり合う。

悠人の手が、ゆっくりとジ——ンズの上から蓮の膨らみを撫でた。布越しでも、その硬さがはっきりと分かる。

「ん……ッ」

蓮は声を殺した。周りに人がいる。声を出すわけにはいかない。

「蓮くん、我慢してるんだ。可愛い」

「可愛い、じゃ……ねえよ……ッ」

悠人の手が、ジ——ンズのボタンに触れた。

「ッ……おい、まさか……」

「大丈夫。ブランケットで隠れてるから」

カチリ、と小さな音がした。ボタンが外される。続いて、ジッパ——がゆっくりと下ろされた。

「あ……ッ」

蓮の呼吸が乱れる。冷たい空気が、下着越しに性器に触れた。

「うわ……すごい、パンツ濡れてる」

「……っせえな」

悠人の指が、下着の上から蓮の先端を押さえた。染み出した先走り液が、布地を湿らせている。

「ん……ッ、あ……」

「声、出しちゃダメだよ」

悠人の指が、下着の中に滑り込んだ。

「ッ……！」

蓮は拳を握りしめた。直接触れられる感覚に、理性が揺らぐ。

悠人の手が、蓮の性器を根元から包み込んだ。熱く、硬く張り詰めたそれを、ゆっくりと握る。

「すごい……めっちゃ硬い」

「……ッ、黙ってる……」

悠人の手が、上下に動き始めた。ゆっくりと、丁寧に。

「ん……っ、あ……」

蓮は歯を食いしばった。快感が、背骨を駆け上がってくる。

悠人の親指が、先端に溜まった先走り液を掬い取った。それを全体に広げるように、ぬるりと扱う。

「あ……っ、く、そ……」

「蓮くん、すごい濡れてる。こんなになるんだ」

「うるせえ……っ」

悠人の手の動きが、少しずつ速くなる。ジュプ、ジュプ、と粘ついた音が、ブランケットの下から微かに響く。

「ん……ッ、あ……ッ」

蓮は必死に声を抑えた。だが、快感は容赦なく押し寄せてくる。

「ねえ、蓮くん」

「……な、んだよ……」

「気持ちいい？」

「……ッ」

蓮は答えなかった。だが、体は正直だった。性器が、悠人の手の中でさらに硬さを増す。

「答えてくれないと、止めちゃうよ」

「ッ……てめえ……」

悠人の手が止まった。その瞬間、蓮の体が激しく反応した。

「……ッ、やめんな……」

「ん？ 聞こえなかった」

「……やめるな……っ」

「どうして？」

「……ッ、気持ち……いいから……」

その言葉を口にした途端、蓮の顔が熱くなった。羞恥で死にそうだった。

「ふふ、素直でよろしい」

悠人の手が再び動き始めた。今度は、さらに巧みに。亀頭の裏筋を親指で擦りながら、全体を包み込むように扱う。

「ッ……！ あ、あっ……」

蓮の腰が浮いた。快感が、一気に駆け上がる。

「ダメ、腰動かしちゃ。バレちゃうよ」

「……ッ、わかって……る……っ」

悠人の手の動きが、さらに速くなる。シュコシュコと、先走り液と摩擦が生み出す音が、蓮の耳に直接響く。

「ん……っ、あ、あ……っ、やば……」

「もう、イキそう？」

「……ッ、う、るせ……」

「我慢しなくていいよ。ほら……」

悠人の手が、亀頭を集中的に刺激し始めた。親指と人差し指で輪を作り、先端だけを扱う。

「ッ……！ あ、ああッ……！」

蓮の体が硬直した。限界だった。

「イク……ッ、イク……っ」

「うん、いいよ」

悠人の手が、最後の一押しをした。

「ッ……！！」

蓮は声を殺して、絶頂を迎えた。性器が脈打ち、熱い精液が迸る。ドクン、ドクンと、何度も何度も。

「うわ……すごい、めっちゃ出てる……」

悠人の手に、腹部に、精液が飛び散る。白く濁った液体が、ブランケットの下で蓮の体を汚していく。

「はぁ……っ、はぁ……っ……」

蓮は荒い息を吐いた。全身から力が抜ける。

「お疲れ様」

悠人の声が、どこか優しく聞こえた。

悠人は自分のポケットからウェットティッシュを取り出し、蓮の腹部を拭いた。その仕草が、妙に手慣れている。

「……てめえ……」

「ん？」

「……なんで、こんな……」

「さぁ？　なんでだろうね」

悠人は、蓮の性器も丁寧に拭いた。そして、下着とジーンズを元に戻す。

「……終わり？」

蓮がそう聞くと、悠人は首を傾げた。

「終わり、でいいの？」

「……は？」

蓮は悠人の股間を見た。ブランケットの下で、明らかに膨らんでいる。

「お前……」

「うん。僕も、ちょっと……ね」

悠人の声が、僅かに震えていた。

「.....ッ」

蓮は躊躇った。だが——次の瞬間、自分の手が悠人の太腿に伸びていた。

「ッ.....蓮くん？」

「.....黙ってる」

蓮の手が、悠人のチノパンのボタンに触れた。

「.....いいの？」

「うるせえ。やってもらっというて、やり返さねえのは気持ち悪い」

「あはは.....律儀だね」

蓮はボタンを外し、ジッパ——を下ろした。悠人の下着の中に手を滑り込ませる。

「ッ.....」

悠人の性器が、蓮の手に触れた。細身の体格に似合わず、しっかりとした存在感がある。先端からは、すでにたっぷりと先走り液が溢れていた。

「.....すげえ濡れてんな」

「だって.....蓮くんの、触ってたら.....」

悠人の声が、掠れる。蓮は、その反応が妙に嬉しかった。

蓮の手が、悠人の性器を握る。悠人ほど器用な動きはできないが、力強く、確実に扱いた。

「ん.....っ、あ.....」

悠人が小さく喘いだ。その声に、蓮の胸が熱くなる。

「声、出すなよ」

「.....ッ、わかって.....る.....」

蓮の手が、リズミカルに動く。ズリュ、ズリュ、と先走り液が潤滑剤となって、滑らかな摩擦を生み出す。

「ん……っ、あ……そこ……っ」

「ここか？」

蓮は、悠人が反応した場所——亀頭の裏筋を重点的に攻めた。

「ッ……！ あ、あっ……」

悠人の腰が浮く。蓮はそれを押さえつけるように、さらに強く扱いた。

「あ……っ、だめ……そんな、強く……っ」

「強くねえと、イケねえだろ」

「……ッ、そう、だけど……っ」

蓮の手が、さらに速度を上げる。グチュグチュと、先走り液の音が大きくなる。

「ん……っ、蓮くん……っ、やば……」

「もうイクのか？」

「……うん……っ、ごめん……っ」

「謝んな。さっさとイケ」

蓮の親指が、悠人の尿道口を押さえた。そのまま、亀頭全体を掌で包み込むように刺激する。

「ッ……！ あ、ああッ……！」

悠人の体が震えた。

「イク……っ、イク……っ、蓮くん……っ」

「おう」

蓮の手が、最後の一扱きをした。

「ッ……！！」

悠人の性器が激しく脈打ち、精液が噴き出した。ドピュッ、ドピュッと、勢いよく蓮の手を汚す。

「はぁ……っ、はぁ……っ……」

悠人は荒く息を吐きながら、シートにもたれかかった。

「……お疲れ」

蓮は、自分の手に付いた精液を見た。白く、粘ついている。熱い。

蓮は、先ほど悠人がしたように、ウェットティッシュで悠人の腹部と性器を拭いた。それから、自分の手も拭く。

「……ありがとう」

「別に」

二人は、しばらく無言だった。バスの揺れと、エンジン音だけが響いている。

「……なあ」

「ん？」

「これ……なんだったんだ？」

蓮の問いに、悠人は少し考えてから答えた。

「さあ。でも……嫌じゃなかった」

「……ッ」

蓮も、否定できなかった。

「寝ようか」

「……おう」

二人は再び目を閉じた。だが、蓮の胸には、先ほどまでとは違う感情が渦巻いていた。

それが何なのか、まだ言葉にはできなかった。